
俺はリア充になりたい

丁稚羊羹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はリア充になりたい

【Nコード】

N4251T

【作者名】

丁稚羊羹

【あらすじ】

五月病になりつつある大学一回生の「俺」は、ふとしたことから高校時代の回想を始める。

いちずに想い続けたにもかかわらず拒まれ、屈折した感情を抱いている「桐島」を軸に、「俺」の頭の中で、鬱々としていたとはいえ楽しかった高校時代の記憶がよみがえりだすのだった。

初めて書くのでかなり下手です。実験のつもりで書いています。一部実体験に基づいて書いています。

至らない所だらけだと思えますのでどんどんシンクをばぐまらえんや
うれしいです。

(鬱々回想記より改題)

第一章 回想の開始

大学生になって一か月半が経った。早いものだ。

大手予備校が言うところの「難関10国立大」の一角を占める某大学の工学部に何とか滑り込んだことよって生まれた自尊心と、生きる活力も、中間テストの失敗やその他もろもろの要素によってそろそろ失われそうになってきた。なんとか気分を変えなければならぬ。

幸いにも俺の部屋は受験生時代とほとんど様子が変わっていない。参考書やら予備校のテキストやら問題集やらが無造作に積み重ねられていて、汚いことこの上ない。

この部屋をきっちり片付ければ、きっと気持ちが晴れるだろうと俺は思った。

そして、特に深い意味もなく、ふと数学の問題集を一冊手に取ると、ぱらぱらとめくった。しばらくしてそれを無造作に床に放り出すと、次は英単語帳に目を通す。そうこうしているうちに、俺の甘酢っぱくもしょっぱく、そして苦い、全くもって理解不能な風味の高校時代の記憶がよみがえってきた。

まあ、もつとも、よみがえる、というほど過去のことでもないし、通学の電車で高校時代の同級生に会うこともしばしばあるし、何より俺は部屋を片付けるつもりだったはずなのだが、それらのことは一度置いておき、俺は回想にふけることにした。

俺の高校時代を回想するにあたって、絶対にはずせない人物が一人

いる。

その名を桐島美加という。お察しの通り女性である。

桐島に対して俺は、愛憎入り混じった複雑な感情を抱いているのだが、少なくとも「愛」に関しては俺から霧島への完全な一方通行であり、「憎」に関して言えばただの逆恨みである。

そして向こうからすれば、おそらく俺の存在はあつてないようなものである。我ながらつくづくダメな男だと思う。情けない。

桐島と出会ったのは高校の入学式前の登校日である。俺と桐島は同じクラスだったのだ。

そして、単刀直入に言っていると、俺は出会ったその日に、あるうことが、桐島に一目惚れしたのである。

今思えばつくづく軽薄だったと思う。しかし俺はその時、まだ幼かった。

どうしようもなく幼かった。桐島に一目惚れしたという事実が、のちに自分を苦しめることになるとは、全く思いもしなかったのだ。

(続く)

第二章 無限の後悔

一目惚れというのは、読んで字のごとく、一目見て好きになることである。

性格がどうのとか、お互いの相性がどうのとかいうことはそのときは問題ではない。おそらく。

容姿が自分のタイプかどうかですべてを判断してしまう、もっとも恐ろしくて、短絡的で、本能的・動物的ともいえる、異性への好意の抱き方と言えるかもしれない、と俺はうがった見方をしてみる。

俺の桐島への好意に一番最初に気付いたのは、隣の席に座っていた椎葉隆彦だった。

椎葉が敏感だったというより、俺がわかりやすかったのだろう。

「お前、桐島好きやろう」 五月も下旬を迎え、暑くなりだしたころ、椎葉がにやにやしながら俺にこう言った。俺は驚いたが、それを必死で包み隠した。

当時桐島はクラス内でも目立たない女子生徒だった。それをいいことに、おれはとっさの逃げ口上で、「あんな根暗女のこと誰が好きになるんじゃ」と必死で反論した。

「ふーん」椎葉は納得したような表情を見せたが、おそらくすべてお見通しだったのだろう。小声で、「俺、あいつのメアド持つてるぞ」とつぶやいた。

・・・たぶんこいつは嘘をついている。そもそもなんでこいつが桐島さんのメールアドレスを持ってるんだ。ありえない。きつとこれは罠だ。そうに違いない。

一瞬のうちに俺の脳内の思考回路がフル稼働した。

俺が「いらぬ」と答えかけた矢先に、椎葉は携帯のアドレス帳を開いた。

そこには確かに、「桐島美加」とあった。しかし、すでに「いらぬ

い」の「い」が出かかっていた。

ここで言い直すのは俺のプライドが許さなかった。俺はきつぱり、周囲に聞こえるのではないかというくらいの声で、「いらない」と答えてしまったのだった。

あのとき、もし俺がプライドを捨てて「欲しい」と言っていたら、どうなっていただろうか、と俺は一瞬考えた。そしてそのあとすぐ「何も変わらなかった」という結論に至った。

その時点で俺が桐島のメールアドレスを知っていて、俺が桐島にメールし、親密になっていたとしても、やっぱり結果は同じに違いないということ、俺が一番わかっている。

結局俺が桐島のメールアドレスを知ったのは、高一の夏休みが終わってからだだった。

しかも、メールアドレスを直接自分で聞きに行くことはとうとうできず、結局は総合学習の連絡に必要なだから、というもってもらい理由をつけて、クラスメートから聞き出すのがやっとだった。

つくづくヘタレである。恥ずかしい男である。

俺はもともと、他人から拒絶されるのを恐れる人間だった。劣等感も強い。

五月の文化祭以降始まった「カップルブーム」に乗れなかった俺は、トーク力でも外見でもクラスの大多数の男子に負けることを自覚していた。

男女関係なく盛り上がる「リア充」グループにも、クラスの隅っこでゲームやアニメ談義に花を咲かせるオタクグループにもうまくなじめず、かろうじて中途半端グループに交じていた。

こんなんじゃない駄目だ。なんとかしなければ。そういう気持ちでいっぱいだった。

幸いにも桐島はおとなしい生徒で、男子との関わりはほとんどなく、男子ももつと派手な女子に目が行っているようだった。今思えば、俺はそれに安住していた。

クラス内ではいてもいなくてもいい存在のまま、友人も数人しかできず、桐島とも授業の合間に多少話す（それでもクラスの男子陣の中では異例だったのだが）以外に特に何も進展はなく、メールのやり取りもさほどしないままに、高一の一年間は終わったのだった。

ここまで回想して俺はひどく後悔した。

やるべきことは山ほどあった。やっておくべきことも山ほどあった。それなのに、やらなかった。やれなかった。

それで結末が変わったとは思えないが。

本ばかり読んで友人をまともに作らず、外遊びもしなかった幼少期の自分にまで怒りと後悔が押し寄せた時点で、俺は面倒くさくなり、一度回想を止めた。

時計を見ると夜の十一時を回っていた。明日は朝から授業がある。

俺は風呂に入り、寝る準備を済ませると、ベッドにもぐりこんだ。しかし、なかなか寝付けなかった。

（第三章へ）

第三章 古傷えぐり。

翌朝、朦朧とした意識の中で目覚まし時計を見て、かなり寝坊したことに気付いた。

ベッドから飛び起きて、あわてて支度をやる。走って駅に向かい、発車寸前の電車に滑り込む。

昨夜は結局ほとんど寝られなかった。かなり眠い。

ウトウトしながら電車に揺られ、乗り換えも含めて数十分、大学の最寄り駅に着いたことにふと気づいた。

ウチの大学の学生と、近隣の、この辺ではお嬢様女子大で有名な大学の学生であふれかえった車内が、一気にあわただしくなる。この駅は、二つの大学の生徒がほぼ同時に降りることを考えると、あまりに狭くて小さい。だが、近隣は住宅街であり、改装は不可能に近いだろう。俺は人だかりに飲み込まれながらも、なんとか改札までたどり着き、定期を通し、駅の外へ出た。新鮮な空気があふれていた。

バスに揺られて大学に着いた。俺は大講義室の後ろのほうに陣取った友人たちのところまで行き、席を確保した。レポートの提出期限やらを話しているうちにチャイムが鳴り、眠い授業をすること有名な教授が入ってきた。

その一限の教養の時間、俺はずっと、高校時代の、桐島絡みの記憶の回想をしていた。

というより、勝手に頭が働いていた。

何の運命のいたずらか、俺は桐島と三年間同じクラスだった。

しかし、楽しかったり、美しかったりする記憶は、大半がつかつたり、悲しかったり、憎かったりしたときの記憶に塗りつぶされ、

ほとんど思い出せない。または、その輝きを失った。

もし記憶に色がついているならば、高三の途中までの俺の桐島絡みの記憶の色はまさに、淡い、美しい水色である。

しかし、高三の夏以降の俺の桐島絡みの記憶は、どうしようもなく真っ黒である。

水色は黒にはかなわない。ほとんどすべて塗り隠されてしまった。

俺はその真っ黒の記憶をたどることにした。

それは自分自身の心の傷口をえぐる行為に他ならなかった。

しかし、俺はなぜか、回想を止めることができなかった。

(第四回へ続く)

第四章 我が悪友たち。

ほとんど何も起きなかった高二の一年間と高三の前半をすっ飛ばして、高校三年生の初夏。

あと半年後には、受験生にとっては運命を分けるセンター試験があるというのに、俺と俺の友人たちは今考えれば笑ってしまうくらいにのほほんとしていた。

俺を含めて、自分たちの実力が自分たちが思っている以上に低いことなど知ってもいなかったのだった。

俺は真面目で有名な地元二番手国立大、O大学の工学部の機械系をなんとなく志望していた。

学力が足りないのは知っていたが、下宿を親が嫌がったのと、地元三番手の国立K大学はリア充ばっくて嫌だ、というのが理由だった。

友人の一人、小村悠太郎も同じ大学の工学部化学系を志望していた。小村は高学力高身長のスपोर्टスマン、かつイケメンで、学校内に非公認のファンクラブまで存在するという憎々しい奴であったが、いつだったかに「桐島美加は学校一可愛い」という内容の会話で盛り上がりつつ以来の仲だった。基本的にはいい奴なのだが、天賦の才が有り余っているせいかなんとなく人を見下したようなところがあり、また、人を嘲るのが大好きである。他人のせいにするつもりはないが、俺の性格が微妙に歪んだのはこいつのせいでもある。

仲間内で唯一の生物選択者、徳元雅典は国立H大学の看板学部、農学部を志望していた。

徳元は外見がいささかヤンキーっぽいのが、根はいい奴である。女子からは妙に人気があり、「オシャレ」だの「面白い」だの、俺とは

正反対の評価を受けていた。

自他ともに認める数学オタクで、天才が全国から集まることで有名な国立K大学理学部数学科志望の藤岡淳也は、見るからにオタクっぽい風貌だが、訳の分からない積極性で手当たり次第に女子に声をかけていて、毎日のように小村に「鏡見てこい」と嘲られていた。

高三からの転校生で、国立T大学薬学部志望の長沢一昭は女子のルックスに対する評価が異常に厳しく、転校三日目にして「この高校の女子は九割ジャガイモ」という名言を残したという噂である。長沢は大手製薬会社の研究になりたい、と常日頃から言っていた。その理由は二つあり、一つは単純に人の命を救いたいからで、もう一つは高収入になればモテて美人と結婚できるかららしい。どちらが本当の理由だったのかは定かではない。

こんな感じのむさくるしい男五人組で、いつも放課後の補習が行われる教室の最後列を占領していた。俺はこの年の春先に一度桐島に告白していたのだがあっさり振られ、忘れなければならぬが同じクラスであるがゆえになかなかそういうわけにもいかず、そもそも二年越しの恋をそう簡単に忘れることなどできず、悶々としていた。

(第五章に続く)

第五章 迷路の始まり

ある初夏の暑い日の放課後のことだった。

いつものように教室の最後列を占拠し、下敷きをうちわ代わりにパタパタしながら教室の人の往来を眺めつつ、俺たち五人は他愛もない思春期トークで盛り上がっていた。

「ま、学年トップは美加たんで決まりだな」

イケメン以外が言っていると気持ち悪い男の気持ち悪い発言にしか聞こえない台詞を、驚くぐらい爽やかに、小村が言つてのけた。俺はこれが彼我の差か、と愕然とした。

「お前ちよつと前まで小嶋さんのほうがいいとか言つてたじゃん」

徳元が一度、教室の端っこにいる小嶋のほうに顔を向けた後、あきれたような苦笑いを浮かべながら言つた。一同が笑つた。小村が焦りだす。

「あれはほんの一瞬の気の迷いだ。それに小嶋さんは滝川とできとるだろうに」

「おつと」

「小村さんこの前、俺の手にかかれは滝川から小嶋さんを奪うなんて余裕、とか言つてたじゃないですか」

藤岡が何故か敬語で、小村の調子に乗つた発言を暴露する。一同がさらに笑う。小村の顔が赤くなる。

「それはネタだ、本気にするな」小村が必死になっているのが見え見えだった。一同が笑つた。

もつとも、ネタとはいえそんなことを言える小村の神経が一同には分からなかったりする。

「理系2クラスのイケメンリア充代表格」の呼び声高い滝川宗佑が、小学校以来「可愛い女子」「好きな女子」の話題になれば必ず話題に上る小嶋紗弥加と梅雨が明けた頃から付き合いだした、というの

は、理系男子界を中心にひそかに流れる噂だった。

二人が一緒にいるのを何度も見た、と言う者がいる一方で、ある者は二人はただの友達同士である、と言い、真相はいまだに謎のままだったが、なにかしらの関係がある、というのは間違いなさそうである。

ひそかに小嶋に好意を抱いていた男たちは心の中で血の涙を流しながらも、滝川だったらしょうがない、と小嶋をあきらめ、何の利害も絡んでいない連中はベストカップルだ、ともてはやした。

桐島に振られたショックから立ち直れず、妙にひねくれている俺は、当然の結果だ、可愛い子はイケメンのところに行く、美しいものは美しいものを好むのだ、お前ら馬鹿じゃないのか、と小嶋にひそかに想いを寄せていた非モテどもを鼻で笑ってやることにしていた。なんと醜い。

小嶋紗弥加は実に優しい女性である。俺や藤岡のような学年内のヒエラルキーの底辺級の人間にも、持ち前の素敵な愛想笑いを向けてくれるのである。

これは「ルックス最強、性格最悪」で有名な3組の小佐野里佳のような、人を見かけでしか判断できない人の皮をかぶった鬼畜には到底まねのできない芸当である。

ちなみに、俺は別に小佐野から実害を受けたわけではない。だが、何故かひどく嫌っていた。

小佐野の親父が地元の建設会社の役員で、何かと金持ち臭のする発言を繰り返していたことが、貧乏サラリーマンの息子である俺の怒りの琴線に触れたのか、あるいは小佐野がしきりに「フツメン未満は男、いや、むしろ人間として認めない」的な発言を繰り返していたからなのか、そのあたりはよくわからないが、なんにせよこいつは、妙に俺の劣等感を逆撫するのである。赦せない。

どちらにせよ、お互いにお互いを人間扱いしていないのは確かなのでこいつに関してはどうでもいい。

俺は必要もないのに駆り出されてきた怒りの感情を封じ込めると、
また他愛もない会話に興じた。

それから数日後、俺はある噂を聞いた。

桐島は、滝川のが好きらしい。

本当かどうかは定かではなかった。でも、もし本当なら・・・
そう思うと、俺の脈は早まり、胃がひどく痛みだした。

(第六章に続く)

第六章 運命を分けた再会。

いろいろ思い悩んだ末、結局桐島本人から事実を聞き出すことはできず、そうこうしているうちに夏休みがやってきた。

俺は五月だったか六月だったかに、電車で二十分ほどのところにある某大手予備校で、夏休みに夏期講習を受ける予約を取っていた。元来怠け者気質の俺は、強制的にやらされない限りまず勉強しない暑かったりすればなおさらである。きつと一か月半の夏休みをごろごろして過ごすだろう。そうなれば、進路指導の教師曰く、受験の天王山である夏休みを無駄に過ごすことになるのは目に見えていた。だから俺は、無理やり勉強する環境に身を置くことにしたのである。

終業式の放課後、俺は早足で、小説や映画にまで取り上げられた某ローカル私鉄の最寄り駅へ向かった。

汗だくの状態のまま電車に乗るのはさすがに気が引けたので、俺は駅のトイレで制汗ローションを体中に塗りたくり、体中からせっけんの香りをぶんぶんさせながら電車に乗りこんだ。

二十分ほど電車で揺られながらウトウトしているうちに、予備校の最寄り駅に着いた。

俺が急いで電車を降り、駅のホームの階段へ向かおうとしたその時、後ろから声をかけられた。

驚いて振り向くと、ずいぶんふりふりの付いた服を着た、背が高く、色が白く、目がくりつとした、綺麗な黒髪が背中あたりまで伸びた美少女が立っていた。

おかしい。こんな素敵な女の子と知り合いだったはずはない。断じてない。何かの間違いに違いない。

こんな女の子に声をかけられるような甘い展開など、俺にあり得る

はずがない。

だがしかし、この素敵な女の子は、確かに俺の名前を呼んだのである。

「わからんの？中学一緒やったでしょ」その声と話し方を聞いて、はっと思いついた。

「・・・飯山！」俺は素つ頓狂な声を上げた。何人かの人たちが一斉に俺のほうを見た。恥ずかしい。

女の子、いや、飯山がニツと笑った。それから俺と飯山は一緒に歩き始めた。

「もしかして、あそこの予備校の夏期講習？」俺はポケットの切符を探り当てながら言った。

「うん」「そつちも？」飯山が聞き返してきたので、俺はうん、とうなずいた。

「そつかあ」「ま、お互い頑張りましょ」「そういつと飯山はまたニツと笑った。俺も笑い返した。

飯山のすぐ隣を歩くのは何だかためらわれたので、俺は飯山と少し間を開けて予備校まで歩いた。

しばらく無言が続いた。

次に飯山が口を開いたのは、自分たちが向かっている教室が同じだということがあった時だった。

「同じ講義やん」飯山はこちらを向いてまた笑った。ずいぶん笑顔の安売りセールだな。

みたいやなあ、と言いながら俺は自分の席に向かい、荷物を机に置き、椅子に座り、教室を見まわした。

白系の色で統一された教室は隅々まできれいに掃除されていて、こみまみれで黒ずんだ高校の教室とはえらい違いである。

きれいな教室に微かな感動を覚え、それにしばし浸った後、俺は勇気を振り絞り、飯山の座る席まで歩いて行った。

飯山はテキストをカバンから引っぱり出し、ルーズリーフを整理しているところだった。

俺が前から近づくと、飯山はこちらを向き、少し微笑んだ。やっぱり、ずいぶん、笑顔の安売り出血大サービスだな。そんなしょうもないことを考えながら、俺は少しの間飯山と話したのだった。

予備校からの帰りの電車の中、俺は珍しく機嫌がよかった。

飯山咲乃は中学時代の同級生である。会話を交わすのは中学の卒業式の日以来だった。

決して存在を忘れていたわけではない。中三の一年間、向こうはどう思っていたかは知らないが、少なくともこちらは信頼のおける友人の一人として接していた。忘れるはずがない。

ただ、地元では有名な難関私立高校に合格し、今後、恐らく自分は絶対に合格できないような難関大学に合格し、有能なキャリアウーマンとして出世していくであろう飯山と再会することはまずないだろう、と俺は考えていた。

だから、嬉しい。すごく嬉しい。

そんなことを思いながら、俺は自分の心に冷静に問いかける。

まさか、お前、ここで再会したのをいいことに、次は飯山を、とか思っていないだろうな。

こんな才女お前には無理だぞ。よくよく考えればわかることだろう。変な色気を出したら、せつかく中三の一年間で築いた人間関係を、お前は自分自身の手でぶっ壊すことになるんだぞ。よくよく気をつけろ。

俺は自分で自分を戒め、一度頭を左右に振った。

飯山との再会が、この後の俺の運命にある意味で大きく左右することになるとは、俺は思いもしなかったのだった。

(第七章に続く)

第七章 桃色の脳内

駅での偶然の再開の後も、俺はしばしば飯山と会い、そのたびお互い声を掛け合って別れる、ということを繰り返した。

あるときは本屋で出会い、一緒に参考書やら何やらを眺めたこともあった。

中学時代から、飯山はどこか物憂げな雰囲気をもとっていたが、高校三年生になり、さらに大人の女性に近づいた飯山のその雰囲気は、色気以外の何物でもなかった。

飯山がその長い黒髪をかきあげてみたり、遠い目をしながら話をしたりするたびに、俺はくらくらするような感覚を感じ、そのたびに俺はあやうくこいつに惚れそうになって、そのたびに心の中の理性維持装置が緊急作動を起こした。

いくら今の恋愛が行き詰まっているからって、さっそく違う女の子に惚れそうになるなんて、これでは俺はとんでもない色ボケ野郎だぞ。頭の中がピンク色に染まっとなるのか。俺は古き良き日本男児の魂を受け継いでいるんじゃないのか。恥を知れ馬鹿者。

こんな理解不能なことを俺は割と真剣に考えていた。つくづく恥ずかしい。

そもそも、この俺のどこに日本男児の魂が受け継がれているというのだろうか。

どう考えても俺は、ただのヘタレで、神経性の胃痛持ちで、モテない童貞野郎である。

なんでも、男女間の友情は、片方がもう片方を異性として認識した段階で終了らしいが、もし本当ならば、俺がちよっと気を抜けば俺と飯山の間友情はもろくも崩壊するだろう。

それはなんとしても避けたかった。何とか俺は自分の感情を抑えようとした。

だが、それは、絶望的な恋愛に身をすり減らし、なんとかそれを忘れようと必死にもがいていた俺にとっては、とてつもなく苦しいことだった。

さらには飯山は、そんな俺の努力をあざ笑うかのように、短いスカートやズボンをはいてはその美脚を惜しげもなく披露し、その胸元は誰が見てもわかるくらいにこんもりと膨らみ、肩まで伸びたさらさらした黒い髪は妙にいい香りを漂わせながらさわさわと揺れた。

飯山と会話していると、予備校のほかの男どもの視線が痛かったぐらいである。

要するに、俗っぽい言い方をすると、こいつは世間的には相当いい女なのである。

八月の初めのある日。

俺はその日、朝一の講習が入っていた。

講習が終わり、予備校の階段を下っていると、手すり越しに飯山の姿が見えた。

俺今、無意識にあいつを探してたよな。どういうことだ。

俺は一言小声で、やばい、と呟いた。

すると、前から声をかけられた。飯山だった。

背中を冷や汗が流れるのが感じられた。

「何がやばいの」何も知らない飯山は不思議そうな顔で聞いてきた。どう言い訳しようか。

「もう八月か、とか思って」俺は動揺を取り繕いつつ、苦し紛れの一言を放った。

「そっやんなあ」「夏休み半分終わっちゃったもんなあ」「飯山が困ったような顔をしながら言った。

俺がうん、と短く答えると、飯山はじゃあね、手を振りながら階段を上がっていった。

いまさら気づいたが、こいつは今日もかなり薄着で派手な格好である。

俺は複雑な気持ちだった。

俺の中のイメージでは、飯山はあんな恰好をするような奴ではない。清楚で真面目な優等生だったはずである。どうしてこんなことになったのだろう。俺には分からない。

もしかして恋をしたのだろうか。男にアピールしているのか。

夏期講習でこの予備校に通って数日間、いろいろな男子高校生を見てきたが、この予備校に通う男連中は、五割が俺とレベル的にはそう変わらないフツメン未満でも、三割がどこまでも平均的な顔面偏差値五十前後の連中で、一割が見るに堪えない残念野郎でも、残りの一割が神に選ばれた特権階級であるイケメンだった。

ここで仮にこの予備校のこの校舎に通う全男子生徒の人数を二百人と仮定すれば、特権階級はだいたい三十人である。

なんと恐ろしい。少なくとも三十人は候補者がいる。

しかも飯山は小佐野のような鬼畜ではない。三割のフツメンどもにもチャンスはある。

なんと候補者の多いことか。俺は狼狽した。今思えば何の意味もない行動であった。

性欲にまみれた獣のごとき思春期の男ども、特にフツメン未満の六割と何人かのチャラ男どもが、あいつのことをじろじろと、いやらしい目つきで見えるのを見るのを思うと、俺は鼻持ちならない。断じてそいつらを赦せない。自分のことなど棚に上げていた。なんとお幸せな思考回路なのだろうか、と俺は今になって思う。

あいつはイメージ通りに、白基調のワンピースに淡い色のカーディガンでも着ていればいいのである。

そう、俺が久しぶりにあいつに会った時のように。

そんなふうに、全くもって身勝手に訳の分からないことを考えながら、俺は家路を急いだ。

高校の部活の友人である筑紫敏史が、午後から俺の家に来る予定になっていたのだ。

（第八章へ続く）

第八章 友は煽る。

俺は家に帰るとすぐにシャワーを浴び、服を着替え、床下収納を適当に漁って、出てきたカップ焼きそばを昼食として食べた。

親父は仕事、オカンは祖母宅へ行っていない。高校受験を控えた弟は友達と一緒に近所の図書館へ行って勉強していて、夕方まで帰ってこない。

ちょうど焼きそばを食べ終わり、片づけを済ませたところに筑紫がやってきた。

しばらく他愛もない話をしていたが、ふと思いつき、俺は飯山の話をすることにした。

筑紫は少したが、飯山のことを知っているからである。

「そついえばさ、今通ってる予備校に飯山咲乃がおる」俺は唐突に切り出した。

「懐かしい名前だなあ」筑紫はしみじみと言った。「しゃべったの？」

うん、と俺はうなずいた。

「いいじゃん」「桐島さんのことは忘れて飯山狙えよ」筑紫はそういうとケラケラと笑った。

こいつは、まず無理だとわかって言っているのである。馬鹿にしおつて。断じて赦せない。

「無理に決まってるだろ」「それに、恋してるみたいだぞ」俺はぴしゃりと言った。

「なんでわかるのさ」筑紫はそう言つと、また笑った。いちいち笑いすぎではないだろうか。

「それがさあ」「服装が、なんていうか・・・エロい」俺は一瞬躊躇したが、言い切った。

「まじかよ」筑紫はそう言つと、神妙な面持ちになった。「そんなことする風には見えなかつたけどなあ」

それなんだよ、と俺は熱を込めて言った。「そんなことする奴じゃなかつたのになあ、と思つて」

「向こうが彼女持ちとかなんじゃない？」筑紫が冷静に言った。

なるほど。俺は妙に納得した。それならなんとなく、気持ちはずわらないでもない。

「つらい恋愛から飯山を開放してやれよ」筑紫はそう言つと、今度はケタケタと笑つた。やっぱり馬鹿にされている気がする。赦せない。

「俺があいつの横歩いてるのが想像できるのか？」俺は冷静に言った。

「全然」筑紫は言い切つた。「お前みたいなさえない男じゃあんな才女釣り合わないわ」

全くもつてその通りだが、こいつに言われると何だか腹が立つ。しかし、事実なので、甘んじて受け入れることにする。

俺がムツとしていると、筑紫がぽつりと言つた。

「もしかしたら、まあたぶんありえないけど、お前のことが好きなのかもな」

その発想はなかつた、と俺は思った。正確に言つと、思いつきはしたが、そんな馬鹿なことがあるものか、と考えてすぐに闇の中へ葬り去つたのだ。

「案外、ああいうできる女つて、お前みたいなのが好きだったりするのかもしれないぞ」筑紫はそう言つと、机の上のポテトチップスに手を伸ばした。

お前みたいなのとはなんだ、と俺はまたムツとしたが、甘んじて受け入れることにした。

確かに俺は、さええない、モテない、神経性胃弱持ちの童貞野郎である。それは否定できない。

「案外、お前から行つてみたらいけるかもよ」「お前だつて、高校

時代に彼女の一人でもほしいだろう」

実は中三から高一にかけて彼女がいた筑紫は、時の為政者並みに無責任な発言を繰り返すと、またケラケラと笑った。

恥ずかしながら、もしかしたら、と俺は一瞬思った。だが、すぐに冷静になり、ありえない、と結論を下した。

あいつに好かれるくらいなら、とうの昔に桐島を彼女にしていたはずである。

しかし、心のどこかで期待をかけてしまう自分がいるのも確かだった。

（第九章に続く）

第九章 期待と不可解な現実と。

筑紫が帰った後、俺はぼんやりと考えた。

もしベタベタしすぎて飯山に嫌われたところで、どうせ高校は違うし、おそらく行く大学も全然違うだろう。それならば、せっかくだから、少しくらい攻めてもいいかもしれない。

まずありえないことではあるが、もし向こうがまんざらでもなかったら、それはそれでラッキーだ。

俺は、ぜひともドヤ顔で筑紫に、飯山とのツーショット写真を見せてつけてやりたい、と考えた。

友情もへったくれもあるか。ここまで来たら引いてたまるものか。これこそが日本男児の正しい生き方ではないだろうか。

その翌日、俺はいつもの時間いつもの階段に向かった。だが、飯山はいなかった。

おかしいな、などと考えていると、後ろから声をかけられた。

誰かと思って振り返ると、いつも飯山と一緒にいる、背が低くて目鼻立ちのくつきりした女の子が立っていた。俺は軽く、首だけで会釈をした。

「サキちゃんのこと探してるんですか？」その女の子はニヤツと笑いながら言った。

肯定するのが何だか悔しかったので、俺は意地を張って違う、と答えた。

「正直じゃない人ですね」その女の子はそう言って笑った。いつもはいかにも性格のきつそうな顔だが、笑うとなかなか可愛い。

「サキちゃんは駅前の本屋さんに寄ってから来るそうですよ」「会いたいんなら、行ってみたらどうですか」その女の子はまるで俺の心を見透かしたかのように、微かに微笑みながら俺に言った。

なんと恐ろしい女子高校生なんだろう。あの子の思った通りに行動してたまるものか。

俺はそんなことを思いながらも、駅前の本屋へ足を延ばしてしまうのだった。

というのも、この夏、俺がこの予備校に来るのは、今日が最後だからだ。

俺は本屋に着くと、参考書コーナーへ向かった。俺が思った通り、飯山の姿があった。

今日は露出の少ない、大人びた格好だった。俺はなぜか安心した。

飯山は俺に気づくと眉をあげて合図した。喜んだ風にふるまうのが何だか癪なので、俺はゆっくり飯山のもとへ歩いて行った。

「ども」飯山はそういうと敬礼のような仕草をした。悔しいが、可愛い。

長い黒髪を頭の斜め後ろで縛ってポニーテールにして、肩に流しているからだろうか。妙に大人びて見える。

「何探してんの」俺は飯山に話しかけながら、すこし手元を覗き込んだ。

飯山は、超高難易度で有名な数学の問題集数冊を吟味しているところだった。

これが彼我の差である。二流公立進学校と、超一流私立進学校の差である。

「飯山、そんな問題集やって、どこ行く気なのさ」俺は苦笑いしながら言った。

「えーっ、内緒にしときたいんだけど」飯山はそういうと笑った。

内緒にしておく必要がどこにあるのだろうか。俺は少し理解に苦しんだ。

「K大?」「違う」「まさか、T大?」「惜しい、ちょっとなんかつけてみ」

T工業大。理系の受験生なら、恐らく一度はその名を耳にしたことのある超名門国立工業大学である。

俺は笑うしかなかった。「なんでまた、そんな男まみれのところに？」俺はやっぱり疑問をぶつけた。

「化学やりたいんだけどさ、日本でT大K大以外で化学強いって言うたらあそこなんだよね」

なるほど。俺は妙に納得した。

「そういうわけで、大学入ったら、女捨てる覚悟です」飯山はニヤリと笑った。

「だから最近妙に着飾ってたのか」俺がそう言うと、飯山はうなずいた。

わざわざ工業大学に入ったからと言って、女を捨てる必要性があるのかどうか、俺にはよくわからないが、こいつなりの覚悟の示し方なのだろう。

それより、筑紫の野郎、適当なこと言いやがって。俺は筑紫に憤慨すると同時に、少し理解に苦しむ事実に驚いた。

そして、少し落ち込んで、家路についたのだった。

(第十章に続く)

第十章 愛すべき馬鹿ども 前篇

そうこうしているうちに、八月も下旬に入り、高校生活最後の夏休みは終わりを告げようとしていた。

今思えば、夏祭りにも花火大会にも行っていない。その時俺は予備校にいた。

高校生活最後の夏休みがこんなでいいのだろうか。いや、いいはずがない。

リア充どもは海へ山へプールへ、彼女と、または友人と繰り出して、ワイワイやっているのだ。

俺たち非リア充にだって、何か一つくらい、思い出になるようなことがあっても良さそうなものである。

八月下旬のある日。

その日から俺の通っていた高校では補充授業が始まった。

なんでも、秋前に高校三年間の全範囲を終わらせ、センター試験対策に集中するための学校の方針らしいが、まだまだ暑い八月の下旬に強制的に学校に来させられて、喜ぶ奴がいるはずがない。

いたとしたらそいつはよっほどの学校大好き人間かDMだろう。

しかも、「リア充の巣窟」たる私立文系クラスに限っては、推薦進学者が多数なことなどを理由に補充への参加が義務づけられていないことが、俺を含む理系クラス生のモチベーションを確実に削っていた。

質のいい良問ぞろいのプリントを配るが、致命的に説明がわかりづらいことで悪評高い数学担当の三村の授業と、いちいち上から目線なのが妙に鼻につく英語担当の田辺の授業を乗り切り、推定年齢三十代中盤とは到底思えない若々しさと美しさを備えた物理担当の谷崎先生の授業を満喫したあと、俺は自分が所属する三年二組の教室

へ戻った。

教室には勉強にいそしむ受験生の姿、は見当たらず、ここにいる数人の生徒たちは皆、くだらない青春トークに花を咲かせている。薄々感づいていたことだが、どうやら俺を含むこの学年の連中には、危機感というものがないようだ。

クラスの男子連中は、某アイドルグループのメンバーの中で誰が一番可愛いかについて熱く議論している。

いつ頃からこうなったのかはつきり覚えてはいないが、このクラスでは、男も女も皆このアイドルグループが大好きなのである。

この状況は、アイドルというくりであれば、ケロケロした声でピコピコした歌を歌っている三人組のほうがずっと好きな俺にとって、は相当居心地が悪かったりする。

俺はそつと二組の教室を出て、一組の教室へ向かった。

一組の教室に入ると、いつもの四人を含む理系クラスの連中が十数人、やはりしょうもないトークに花を咲かせていた。

「おつ、居眠り番長」教室に入るなり徳元は俺に向かってこういうと笑った。

確かに俺は数学の授業中爆睡していたが、こいつだって大概よく寝ている。俺がこんなことを言われる筋合いはない。

そんなことを思っていると、机に突っ伏してぐったりしている小村が顔だけこちらに向け、俺の方を見た。

「おい」小村がうめくような声で言った。

「どうした」俺が聞き返すと、小村は突然手足をバタバタさせた。

「八月の初めあたりにお前めっちゃかわいい子と話してたじゃねえか」

「お前にはもつたいなさすぎる、とつと俺に紹介しやがれ」

こんなふうな自分勝手な台詞を次々と、暴れながら並べ立てる小村の姿を見て、俺は笑うしかなかった。

「ちよつと、その話は聞いてないぞ」徳元、藤岡、長沢が見事なま

でと同時に、同じ言葉を発した。

俺はさらに笑った。笑うしかない。

「なんだよニヤニヤしやがって！彼女か！」「お前には説明責任がある！」小村がまた喚いた。

俺たち五人があまりにうるさいので、教室の真ん中あたりで勉強していた一組の女子数名が俺を睨んだ。

あくまでも俺の責任ではない。とんだとばっちりである。

「どんな女の子なんですか？」徳元がへらへらしながら、なぜか敬語で小村に聞いた。

「えつとなあ」「目がでかくて可愛くて髪が長くて背が高い」「で・
・胸がでかい」

小村が女子の存在を一切気にせず大声で言った。

「ちよつと待て、それ最強じゃねえか」長沢のテンションが異常に上がった。

男というのは総じて、このように馬鹿な生き物である。

男四人が、紹介しろとか名前教えろとかスリーサイズ教えろとか、口々に好き勝手なことを喚きだしたので、俺はうるせえ、と一喝した。

「中学の同期で名前は飯山だ」「S高校に通ってる」必要最低限の情報だけ喋ると俺は椅子に座った。

「S高校つつたら、女子高じゃねえか」小村のテンションが異常に上がる。

合コンの開催を要求する、などと言って徳元と長沢が再び喚きだした。

一方、藤岡は「同級生には興味がない」という捨て台詞を残して進路指導室へ向かった。

進路指導室はクーラーがきいており、きわめて快適な楽園である。俺は逃げるように、藤岡の後を追って進路指導室へ向かった。

(第十章へ続く)

第十一章 愛すべき馬鹿ども 期待篇

進路指導室に向かったはいいものの、三人は俺についてきた。あまりにも必死すぎて、俺は笑うを通り越していささか感心していた。

確かにうちの学年の女子は、大半がまったくもって可愛くない。ちなみに、男子もかっこよくない、というのも否定しえない事実である。

一部の可愛かったり普通だったりする女子は、ほとんどがイケメンリア充の彼女になっている。

ちなみに、可愛くて男がいない、という奴は総じて性格が終わっている。

たとえば小佐野のように。

だから、男どもの多くは、他学年や他校や二次元の世界に安らぎを求める傾向があり、女子陣の多くは彼女がいないイケメンに群がっていた。

そういうわけで、小村はいろいろな女子に言い寄られていたが、あまりに小村の理想が高いので、これまで誰とも付き合うには至っていない。

恋愛でも進路関係でも、理想ばかり高い、というのがこの学年の連中の精神構造の特徴であるらしい。俺も含めて。

「マジで紹介してくれ」階段の踊り場にさしかかったころ、小村が哀願するような目で言った。

ここまで来ると可哀相である。

「俺もせめて、どんな子が一目見たい」徳元が腕を組みながら言い、長沢もそれに同調した。

正直言って、この変態ども四名に飯山を紹介するのは、もはや一種の犯罪のように思える。

特に、小村は外見こそイケメンだが、その中身は生粋の変態である。こんなところでは言えないような恥ずかしい性癖や気持ち悪い性癖が山ほどあるのだ。確かに飯山自体、ところどころ人間的に破綻しているようなところもあるが、それでも俺やこいつらほどではない。ひとまず、まずはなんとか小村をあきらめさせなければいけない。俺は小村のほうを向いた。

「お前、夏休み前はあんなに桐島、桐島言ってたじゃないか」

「さっそく飯山にお乗り換えということは、桐島と何かあったのか」小村が今までに見たことのない表情をした。俺は必死で笑いをこらえた。

「違う、違う、断じてそんなことはない」

「美加たんもいいけど、初めて見て以降、その飯山ちゃんのことしか考えられないんだよ、察してくれ」

「毎日俺の妄想の中に出てきては俺に抱きついてくるんだよ」

などといった、イケメンが言っても大概気持ち悪い発言を、小村は半泣きになりながら並べ立てた。

小村の変態発言がエスカレートし、そろそろ吐き気を催しそうになってきた。

こんな発言を公衆の面前でするような男に、飯山を紹介するなどもつとのほかである。

「あんたら、特に小村に紹介したらいろいろ面倒くさいことになる気がするから嫌だ」

俺ははつきりと言った。しかし、この男どもはしつこい。

「お前だけそんな可愛い子といちゃいちゃしてずるい」「お前こそ、桐島さんのことが好きじゃなかったのか」などと、各自好き勝手に反論の言葉を並べ立てはじめた。

俺のプライベートな領域にまで話が進みそうになったので、俺は仕方なく妥協案として、本人がいいと言ったら、という条件を提示し、この変態どもは渋々それをのんだ。ようやく話がおさまった。

俺は全員の目の前で飯山にメールを送った後、涼しい進路指導室で

のんびりと、O大の過去問を眺めたのだった。
このあとに起きる面倒事のことなど、わかるはずもなかったのだっ
た。

(第十二章に続く)

第十二章 愛すべき馬鹿ども 完結篇

その日の夕方ごろ、飯山から返信のメールが届いた。文面を一目見て、怒っているのが伝わってきた。

その内容を簡潔に説明すると、こっちは勉強で忙しいのだ、あんたと予備校で会ってちょこちょこ会話するくらいの時間は無駄とは思わないが、あんたやあんたの友達と一緒に遊んだりして一日つぶせるほどこっちは暇じゃない、あんたたちもいい加減目覚めて勉強しなさい、というものだった。

正論過ぎてもはや反論の余地がないので、俺は飯山を必死でなだめ、事情を説明した。つまり、小村が飯山を本屋で見るときに惚れた、ということにした。

次に返ってきたメールを見て、俺は一瞬目を疑った。

「その小村っていう子に一回会ってみてもいいかな」

前言撤回というやつか。

あいつはこんなことを言ったりやったりするような奴ではない。

もっとなんとというか、真面目でストイックな奴である。

噂で聞いたことだが、中三になる直前に、受験を理由に一年の時から付き合っていた男と別れたらしい。

小村の噂は淀川をも超えて、S高校にまで伝わっていて、飯山はそれで心が動いたのだろうか。

結局あいつも人の子だったということだろうか。

あんまり詮索するのも気が引けたので、俺はあえて何も聞かなかった。

そして、小村と連絡を取りながら、顔を合わせる日程を具体的に決めたのだった。

翌日、俺は四人に結果を報告した。

小村以外の三人は口々に文句を盛大に言った。これだからイケメン

は特権階級なのだ、と言つて長沢が小村の頭をはたいた。俺は笑うのを我慢できず、笑ってしまった。すると今度は怒りの矛先が俺に向いた。

「お前の交渉力が低いからこんなことになったんだ、このへたれ」「役立たず」「虫けら以下の下等生物」など、聞くに堪えない罵詈雑言を三人は俺に容赦なく浴びせた。

いい加減イライラしてきたので、俺は黙れ、と一喝した。

「俺はお前らの写真とかは一切見せていない」

「小村という男がお前に興味があるようだ、と言つたら、会いたいといわれたまでだ」

俺は正しい事実を伝えた。まあたぶん、S高校にも小村の噂が流れている、というのが事実だろうが。

三人はそうか、とだけ言うと、勉強に戻った。

俺に向けられた言葉の暴力への謝罪はないようである。赦せない。

三日後。

その日は俺が飯山に小村を会わせることになっている日だった。

俺は朝から、いったい奴はどんな格好をしてくるのだろうか、とどきまぎしていた。

あんまりいやらしい格好をされたら、いろいろと問題がある。その辺は察していただきたいと思った。

学校帰り、制汗剤のにおいをぶんぶんさせながら俺と小村は待ち合わせ場所の駅前の広場に向かった。

銀行の前のしょぼい噴水のあたりに、S高校の制服を着た背の高い女子が立っていた。飯山である。

変な格好してないな。

俺はなぜか安心した。

俺が飯山に近づくと、向こうもこちらに気付いたようで、目で合図をした。

「はじめまして」最初に口を開いたのは飯山だった。

あからさまに挙動不審な小村が噛みそうになりながらはじめて、
と言い、それを見て俺は吹き出しそうになった。
俺たちはそれから、駅の近くの喫茶店に向かった。

喫茶店はすいていて、すぐに窓際の四人席へ案内された。

飯山が片方の二人分のスペースに座り、向かい合ったスペースに俺
と小村が座った。

ウェイトレスさんが注文を聞きに来た。

俺はアイスマルクティー、小村がアイスコーヒー、飯山がアイスレ
モンティーをそれぞれ注文した。

しばらく妙な空気が流れる。なんとかしなくては。

「えっと、こいつが小村悠太郎」俺が小村のほうに手を向けながら
言うと、小村は少し間を開けてからよろしく、とだけ言った。

「飯山咲乃です」飯山はそれだけ言っただけ首をすくめるようにお辞儀
をした。こいつがよくする仕草の一つである。

お互い緊張しているのか、どちらも全く話さない。

レモンティーを飲みきったあと、しばらく窓の外を見つめていた飯
山が突然小村のほうを向いた。

「ほん、と可愛らしい咳ばらいをした後、ようやく口を開いた。

「えっと、事情は全部聞いています」

「お互い無駄にしている時間もないかと思えますから、端的に言い
ますけど、正直私たち受験生に、恋愛は不要だと思います」

「私たち受験生は、今は異性ではなく志望校に恋をすべきなのでは
ないでしょうか」

「そういうわけで、あなたも、私のことなんか忘れて勉強なさって
ください」

「お互い、自分を律して勉学に励み、来年の春栄冠を勝ち取りまし
よう」

「それでは、失礼します」

えらく堅苦しい言い方で簡潔に、自分の意見を述べると、飯山は机

にレモンティーの代金を置き、カバンを持ってそそくさと出て行った。

小村はただただ唾然としていた。

そして俺は、笑いをこらえるので精いっぱいだった。

(第十三章に続く)

第十三章 恋愛地獄前夜祭

俺はしばらく笑いをこらえていたが、とうとうこらえきれなくなつた。

「ぶふっ」思わず声が出た。小村がこちらを睨んだ。怒っているようにも、泣きそうになっているようにも見える。

「要するに俺は、告白してもないのに振られたわけか」

「うん、その通りだな」俺はにやにやしながら言った。

「なんか、不完全燃焼感極まりないんだが」小村が不服そうに言った。

「だろうな」「あいつは興味ないことにはとことん興味ない奴なんだ、許してやってくれ」

小村はふと天井を仰ぎ、それから髪をかきむしった。

「俺、あんなに女の子にそっけない扱いされたの初めて」「なんか泣きそう」小村が力のない声で言った。

俺は必死で笑いをこらえた。これまでこいつは、そのルックスから、女の子に冷たくされることがなかったのだろう。飯山の行動は、こいつのプライドを酷く傷つけたようである。

「つかあいつ相当変な奴だな、うん」小村は自分を正当化するような独り言を言った。

男らしくない。いい加減負けを認めるべきではないだろうか。

「ていうか、事情は聞いてますってなんだよ」

「お前あの子に何て言ったんだ」小村が気が付いたように言った。これはまずい。八つ当たりされる。

「俺と話してるお前を本屋で見で、会いたい、紹介してほしいって言い出した男がいる、といったまでだが」あわてて俺は事実を述べた。まあ、そのあと、「惚れたんだと思う」と言ったのも事実だが、「それで深読みするあの女も相当な自信家だな」「まあ、読みは当

たってるが」小村が悔しそうに言った。小村は自分史上初の事態に、どう対応していいかわからなくなっているようである。

「さっさと代金支払って帰るぞ」俺は席を立つと、うなだれる小村を小突いた。

ちっ、と小村が舌打ちをする。

小村がとぼとぼ帰っていく様子を見て、俺はやはり笑うしかなかった。俺もなかなか悪趣味である。

家に向かう途中、ケータイを取り出して開くと、一通メールが入っていた。飯山からだった。

「いきなり勝手に帰ってごめんね、どうか悪く思わないでください。小村君のフォローお願いします」

正直謝られても困るのだが、俺は立ち止まり、返信メールを打った。

「小村は女の子に振られた経験がないみたいでかなりへこんでた」

「ずいぶん大胆な行動に出られて、もはや笑うしかなかった」

「何を思っであんなことをしたのかを教えて欲しい」

と打って俺はメールを送信し、また歩き出した。

俺の家が見えてきたころ、飯山からメールが返ってきた。

「ここだけの話だけど、あたしの友達が中学時代小村君と同じ学校で、告白して振られたみたい」

「別に復讐っていうわけじゃないけど、今のあたしに恋愛は必要ないし、小村君にも勉強に集中してほしいから、あきらめてもらうためにも、だいぶひどいことしました」

「小村君のフォロー、ほんとお願いね」

フォローと言われても困るのだが、というか、八つ当たりされるに違いない。

そんな気はさらさらないのだが、わかった、とだけ打って、俺は飯山にメールを返信した。

そしてその翌日から、俺が予想した通り、俺は夏休みが終わるまでことあるごとにずっと、小村にウジウジと恨み言を言われ続けたの

だった。

そして夏休み明け、俺の運命がいよいよ動き出すのだった。

（第十四章へ続く）

第十四章 現実世界、そしてふたたび過去へ。

ふと気が付くと俺は、うつぶせ状態で暗闇に放り出されていた。その暗闇には、四方からかすかな光がさしている。太陽の光だろうか。

頭がボーっとする。体中が痛い。いったい何が起きたのだろう。いったい俺はどこに来てしまったたというのだろう。

日頃の行いが悪すぎたせいで、いよいよ無間地獄の底へ落ちてしまったのだろうか。

俺にはまだやり残したことが山ほどある。ひとまず一度でいいから妄想世界ではなく現実世界で

可愛い女の子とあんなことやこんなことをしたかった。俺の青春をどうしてくれる。

しきりにおれを呼ぶ声がする。誰だろう。

おい。もう終わったぞ。起きろ。

男の声がする。

ふっと頭を上げると、そこは大学の講義室だった。

俺の頭はまだ朦朧としていて、全く状況が呑み込めていない。

「開始後五分でぐっすりだったぞ、さすが居眠り番長」

学科の友人の一人である高杉将士はそう言うと言った。

その言葉を聞いて俺はようやく、自分が回想を進める途中で眠りに落ちてしまったこと、そのとき見ていた夢の中でまで高三時代の回想をしていたことを理解した。

初めは桐島絡みの回想だったはずなのに、途中いきなり飯山の回想に話が飛んだのは、恐らく、同じ大学の工学部に奴が所属していて、俺の斜め前で授業を受けていたからであろう。

俺の回想通り、飯山咲乃は中三の時と変わらず、優秀な学生だった。センター試験ではまんべんなく九割近い点数を取り、意気揚々と東京へ行き、T工業大学を受験した。

帰ってきてから、物理ができなかった、落ちたかもしれない、と言いついたが、俺は飯山のことだし大丈夫だろう、と思っていた。

しかし、飯山は不合格になった。最近成績開示をしたところ、一点差だったらしい。

中期のO府立大工学部、後期のK大学工学部、併願した私立のD大理工学部、W大先進理工学部にはすべて合格しており、悩んだ末に俺が前期で合格したK大学工学部を選んだ。

俺は機械工学科で、飯山は応用化学科という違いはあるが、そもそも飯山と同じ大学に通っているということに、俺は強い違和感を感じている。

自分がずっと、絶対に勝てないと思っていた存在と、前期と後期という差こそあれ同じフィールドに立っているというのは、俺にとっては案外気持ちの良いことではない。

ちなみに、せっかく華のある大学に行くんだから女の子らしくすればいい、青春時代は今しかないのだ、という俺のアドバイスもどきに飯山はなんとなく納得したらしく、毎日工学部生とは思えないくらいに着飾って登校している。

放課後、俺は所属する音楽系サークルの練習に出るべく、学生会館、通称「学館」へ向かった。

工学部から馬術部の馬場前へつながる道をひたすら直進すると、コンクリートむき出しで少し色のくすんだ、この大学には似つかわしくない建物が見えてくる。これが学館だ。

階段を登って学館に入り、同じサークルの連中と喋ってから、俺は楽器倉庫へ向かった。

楽器倉庫への階段を登る途中、社交ダンス部の連中が大挙して階段

を下ってきた。

俺はふと、高三の体育祭のフォークダンスを思い出した。このことに関するエピソードに関しては、あまりにも忌まわしいので、俺はあまり思い出したくない。

しかし、俺の頭はまたも、勝手に動き出したのだった。

(第十五章へ続く)

第十五章 奇跡と悪夢は紙一重

夏休みが終わって最初の体育の授業。

俺の通っていた高校では、体育祭の学年種目では、一年生は盆踊りもどきを踊り、二年生は組体操をやり、三年生はフォークダンスで楽しく遊ぶ、というのがお決まりであった。

その練習が今日から始まるのである。

男子陣の多くは、合法的に女子の手を握り、腰に手を回せる機会を得て、謎のやる気を見せていた。

だが、俺は正直言っただけ嫌だった。

理由は簡単、俺はさえない、モテない、神経性胃弱持ちの童貞野郎だからである。

相手になる女子も俺みたいなのじゃなくてイケメンがいいだろうに、などと考えるだけで俺は胃が強烈に痛み、今すぐにもトイレに駆け込みたいくらい酷い状況に追い込まれたのだが、必死で我慢した。多くの男子は「男と組む」というのをなんとしても避けたがっていたが、俺はむしろそっちのほうが気が楽である。そうやってほしい。

出席番号に従って男女一列づつに並ぶように指示があり、俺は出席番号がひとつ違いの滝川宗佑の姿を探した。そしてふと、この状況が最低最悪の状況を生み出しうることに気付いた。

たとえば俺が女子だったとして、あと一人ずれていたら滝川とペアを組めたところを、俺とペアを組むことになったら、俺は自分の運命を呪うだろう。てめえなんか男と組んでるよ、と思うだろう。

そんなことを考えていると、ただでさえ痛かった胃がさらに痛みだしたが、授業途中、みんなの目の前でトイレに行くのも恥ずかしいので、俺は必死で我慢した。

これで基本のペアは確定です、という体育教師の声が聞こえたので、俺は恐る恐る女子のほうを向いた。

俺の隣には、桐島美加が立っていた。

桐島の姿が目に入った瞬間、俺の胃にさらなる鋭い痛みが走ったが、なんとかこらえた。

腹痛のせいかわからないが、一瞬世の中のすべてがスローモーションに見えた。

神様というのが世の中にもしいるとして、そいつはいったいどういう思考回路をしているのだろうか。

もしこれが半年前なら、俺は小躍りして喜んだだろうが、今の俺にとってこれは拷問以外の何事でもない。俺にとっても桐島にとっても、今の状況はとんでもなく不幸なことである。

しかも、あと一人ずれていたら、桐島の相手は滝川である。

俺は桐島から、滝川と合法的に手をつなぐ手段を奪ってしまったのである。

もう俺の胃は限界に達していた。痛すぎる。なんとかしてくれ。

隣で桐島がよろしく、とかなんとか言ったような気もするが、今の俺にはそれが幻覚なのか現実なのかさえ分からない。なんとか痛みがピークを越したところには、体育教師はダンスの振り付けの説明を半分くらい終えていた。

しまった。前半の振り付けが全く分からない。

後半の説明を必死で聞いた後、俺は勇気を振り絞り、桐島に話しかけた。

「前半の振り付けがわからん」「眠くて聞いてなかった」

桐島がえっ、とこっちを見た。「あたしもよくわかんない」「聞いてくれてると思ってた」

なんと無責任な二人なのだろうか。仕方がないので、前の二人を見ながらたどたどしく踊った。

正直なところ、卑屈でネガティブな考えとか、変な気遣いさえ忘れてしまえば、これはかなり楽しい。

俺は今、学年屈指の美少女と手をつなぎ、半径50センチメートルほどの円の中に身を寄せ合っておさまり、そのうえ腰に手を回しているのである。

俺はその事実にも、何も考えず酔い痴れることにした。その方が幸せになれると気づいたからである。

俺は桐島の白く透き通るようななじや控え目に膨らんだ胸元や細長く伸びた手足をちらっと見ればドキドキし、そのたびに自分を律する、ということを繰り返した。

ちよつとした会話も交わすようになった。それと同時に、桐島の視線が時々明らかに滝川のほうを向いていることに気づいて少し落ち込んだりもした。

とはいえ、気づかないうちに練習の時間が楽しみになっていた。そんな日々がしばらく続いた。

（第十六章へ続く）

第十六章 体育祭、絶望の入り口

そうこうしている間に体育祭がやってきた。

はつきり言って俺からすれば、体育祭は最低最悪のイベントでしかない。

というのも、俺は運動神経が皆無だからである。

毎年体育祭で活躍し、女子からの黄色い声援を一身に浴びるイケメンリア充どもに嫉妬すら覚えていた。

中学・高校時代にモテるためには、ルックス、運動神経、トーク力の三つのうちどれか一つ以上の能力が高く、かつ残りの要素が平均点以上であることが求められるらしいが、この三つのいずれも平均値を大きく下回る俺はいつたいどうすればいいのだろうか。

この日俺は、炎天下の下、ぎらつく太陽を睨みつけていたらくしゃみが出まくったこと、競技を終えて帰ってきたイケメンリア充が女子に囲まれているのを見て見ないふりをしたこと、騎馬戦で酷い目にあつたこと、ムカデ競争でこけて後ろの太つた奴が俺の上にこけてきて死にそうになったこと、そして、桐島の視線がやはり滝川に向いていたことくらいしかはつきりと覚えていない。

それはおそらく、このあとの記憶が強烈すぎるからではないか、と俺は思う。

体育祭翌日の朝、教室では、昨日の体育祭のあと滝川宗佑と小嶋紗弥加が一緒に手をつないで帰っていた、という話で持ちきりだった。確かに夏休み前から、二人が付き合っているのではないか、という噂は流れていたが、二人ともそのことを否定していたうえにきちんとした裏付けもなかったため、あくまでもそれは噂にしか過ぎなかった。

しかし、手をつないで帰っていた、となると、さすがに二人は交際

の事実を認めざるを得なくなる。

二組の教室に滝川が入ってくると、クラスの男どもは一斉に滝川のもとへ駆け寄り、芸能レポーターさながらに、質問を次から次へと投げかけた。

滝川はやれやれ、という顔をすると、何を思ったか教壇に上がった。そして教壇に手をつくすと、まるで教師が生徒に重大発表をするかのような姿勢になった。

そして、叫んだ。

「わたくし、滝川宗佑は、小嶋紗弥加さんと真剣にお付き合いさせていただいております」

大胆な行動に教室にいた一同がどよめいた。そして笑い、拍手をした。

俺も拍手をした。だが、同時に心穏やかではなかった。桐島である。練習の時の様子を察するに、おそらく桐島も滝川のが好きである。

あいつはどうするのだろう。教室の後ろ側の出入り口に視線を向けようとしたその時、桐島の親友である長浜翔子と目が合った。俺はすべてを悟った。

教室内が落ち着いた後、長浜は俺に近づいてきた。

「美加のこと、知ってるの？」長浜はひそひそと俺に言った。

「まあ」「体育祭の練習の時とかあからさまだったし」俺は一瞬躊躇してから答えた。

「そっかあ」「まだ好きか？だからわかるんか？」長浜が笑っているとも悲しんでいるともつかない顔をした。

「どうなんだろうな、自分でもわからん」俺は窓の外を見ながら言った。

「まあ、あえて深くは聞かない」そう言った長浜に、俺は心から感謝した。

「あたしは二人のことは前から知ってた」「でも隠してた」

「隠し切れなくなつたから昨日の晩に全部喋つた」「だからあなたはお気遣いなく」

長浜はそう言うと、俺のほうを見て頭を少し上下に振り、女子陣の輪の中へ去っていった。

お気遣いなく、って言われてもなあ。

俺は窓の外を見ながらため息をついた。

俺はただただ切なかつた。他人事のはずなのに切なかつた。

（第十七章へ続く）

第十七章 鬱々、失われた四十日間の始まり。

俺は家に帰ってから、無力感に襲われた。

もし、もし、俺が桐島のお眼鏡にかなうような男だったなら、桐島はこんな思いをせずに済んだに違いない。同様に、俺もこんな思いをせずに済んだ。

だが、現実はあまりにも理想とはかけ離れていた。俺は桐島とは釣り合わない男である。

俺がもつとイケメンだったら。

俺が、運動神経抜群で、トーク力の高いリア充だったら。

誰も不幸にならずに済んだ。俺の責任だ。そうに違いない。

まともに外遊びもせず、友達も数人しか作らず、ひたすら内向的な遊びに興じた俺の責任に違いない。

今思えば、少し見当の外れたことを、俺は真剣に考えていた。

勉強に全く手が付かず、何事に対してもやる気を喪失したまま、時間だけが過ぎていった。

俺の失われた四十日間の始まりである。

いよいよ十月に入り、進路が決まった連中がちらほら出だした。桐島もその一人だった。

「最近桐島からやたらメールが来る」ある晴れた日の放課後、小村が俺に言った。

俺は複雑な心境になった。立ち直りが早いのはいいが、早すぎやしないか。

俺が桐島のメールアドレスを小村に教えたのは五月だったか六月だったかのある日だった。

俺が桐島にメールを返信するのを偶然見た小村が、お前だけずるい、などと言い出してごねたので、俺は渋々教えたのだが、もともとほ

とんど会話をしたことの無い二人のメールはなかなかうまくいかず、小村はすっかり桐島に「飽きて」しまっていた。つくづく勝手な奴である。

にもかかわらず、桐島がいきなり小村にメールをするというのは、やはり裏があるのだろう。

「返してんの？」俺が聞くと、小村は首を横に振り、あんまり、と答えた。

「飯山咲乃ちゃんが、受験生の本分は勉強だって言ってたから、俺はちゃんと勉強する」

「ちゃんと受かったらメアドももらえるみたいだし」俺はやれやれ、と思った。

あの事件の後、小村の相手をするのがあまりに面倒だったので、九月の初めごろに再度飯山に会った時、俺は、小村が第一志望の〇大工学部の化学系に合格した暁には飯山のメールアドレスを小村に教えていい、という約束を取り付けたのだった。

それ以来、小村は必死になって勉強している。恋の力は恐ろしい。飯山の人間操縦術というか、そういうものが俺は少し羨ましいが、その一方で少し怖い。

これが本当の意味で頭のいい人間のなせる技なのだろうと思っていた。

しかし今の様子を見る限り、小村は、学年屈指の美少女に自分に気があるような素振りをされて満更でもなさそうである。

はつきり言って、こいつの考えていることはわからない。

息をするように嘘をつき、嘘を言うような顔で事実を言い、他人には到底理解不能な行動をとる。

「やっぱりさ、高校時代に彼女作っとくっていうのも必要かもな」急に、小村がニヤツと笑いながら言った。

「制服デートとか、中高生の時代にしかできないし、それができなかったら、いくらいい大学行っても絶対後悔するよな、やっぱり」

小村がそんなことを言った。

そのとき、俺の中で何かが、音を立てて一気に壊れた。いくら努力したって、無駄なことがある。いくら努力したって、取り戻せないものがある。

時々新聞の三面記事に、エリートが援助交際に走って捕まった、というニュースが載っていることがある。それまで築いてきた世間での立場を全て失うにもかかわらず、である。

彼らはきつと中高生時代を勉強漬けで過ごし、年を取ってから、失われた青春に耐えられなくなったのだろう。

いくら努力したって、小村のような人間にはあらゆる要素で勝てない。

いくらいい大学に行っても、幸せになれるとは限らない。

だが、少なくとも、中高生時代に可愛い彼女がいれば、そいつは一生幸せをかみしめることができるのではないだろうか。

そう思うと、ひどく勉強がアホらしくなった。俺の一日の勉強時間は日増しに減っていった。

10月中盤、最後の記述模試が終わったころ、桐島が小村に必死で「媚を売っている」ということを小村本人から聞かされた俺は、いよいよ何もかもやる気を失った。

そして、愛しさやらなんやらの一部分が、どす黒い憎しみに変質していることにふと気づいた。

俺の運命の歯車が、あちこち狂い出していた。

(第十八章へ続く)

第十八章 微かな光

十月下旬。

俺は受験生とは思えない自堕落な生活をしていた。

朝は遅刻ギリギリに起き、学校へ行き、ほとんどの授業で寝る。放課後は学校に残っていたが、ほとんどまともに勉強せずにいたらとし、時折他人の邪魔になるようなことすらした。

勉強することの意義を見失っていたので、勉強しなくても何の違和感も感じなかった。

ある日、進路指導の中岡先生が俺を呼び出した。

その内容は、最近あまりにも自堕落ではないか、そんな態度でいられたらみんなに迷惑がかかる。

お前はもともと優秀なのだから今からでも頑張れば国公立大には必ずいける。どうか頑張ってくれ。

というものだった。

しかし俺の気持ちは全く動かなかった。授業でこそやる気のあるそぶりを見せたが、放課後は小村にひたすら恨み言を言い、誰に聞かせるでもなく愚痴を言い、藤岡が必死で構築した後輩の女子との関係を破壊することに精を出した。

教室で見る桐島はもはや限りなくどうでもいい存在である。

クラスの彼女持ちのイケメンと、何故か一緒に下校していたことがあったが、俺はもはや興味すらわかず、ただただ嫌悪感が募った。かつて俺の目に、この女の子は天使のように映っていた。ならば、今この子は、俺にとっては墮天使なのであろう。

道を何人かで歩いていて、誰かがふと「あの子可愛い」などと言っても見向きもしなくなった。

この前、大学生になってから読んだ小説で、主人公が失恋したショックから恋愛不要論を説いてまわるというくだりがあったが、実は

俺もまさに同じことをしていた。

もはや俺は、どす黒いオーラすら放っていたのではないだろうか。自分がどんどす黒くなっていくのが実感として感じられ、そんな自分に嫌気がさす日々が続いた。

十一月になるうか、というある日。

クラスでは席替えが行われた。俺はもはや席替えの楽しみを失っていたので、前の席にならないこと以外に何の希望もなかった。

くじ引きが行われ、教壇に立ったホームルーム担当委員が、にやにやと笑いながら席替えの結果を発表した。

後ろから三列目の真ん中。悪くない席だ。俺は荷物をまとめると、その席へ向かった。

俺の隣は全く話したことのない男子生徒と、つかみどころのない性格で定評のある村山文子だった。

村山は桐島の友人で、よく一緒にいるが、ほとんど話したことはなかった。

瞳がキラキラして、いつも幸福感がにじみ出ている、死んだ魚のような眼をして汚れたオーラをまとった今の俺とは対極に位置する存在である。

友達と和やかに談笑する村山を横目で見ながら、俺はこの子と関わってはいけない、と思った。

俺の心の中の、憎しみとか劣等感とか絶望感と言ったものが、会話などを通してこの子に移って行ってしまっているのではないか、などという意味の分からないことを、俺は至って真剣に考えていたからである。

そんなある日の放課後。

「この問題わからないから教えて」という声が後ろから聞こえた。声の主は村山だった。

俺はその頼みを断らなかつた。断れなかつた。そして俺は村山と一

緒にその問題を解くことになった。

俺が説明を交えつつ、一通り解答を済ませると、村山がそのキラキラした目で俺を見た。

「すごいなあ、さすがやなあ、ありがとう」そう言って村山が笑った。

普通ならば、満足感やら幸福感やら達成感で満たされるはずの心に、激しい痛みが走った。

そんな輝いた目で俺を見ないでくれ。ありがとうなんてやめてくれ。今の俺にはしんどすぎる。

さながら、吸血鬼が太陽の光を浴びて悶え苦しむように俺は苦しんだ。

そして思った。

普通の心を取り戻したい。この黒く染まった心をなんとかしたい。そんなことを思ったのは初めてだった。

(第十九章へ続く)

第十九章 歪んだ達観

普通の心を取り戻したい、とは思ったものの、なかなかそういうわけにもいかなかった。

桐島の小村への「媚売り」はおさまっていたが、一度呼び起こされた劣等感や絶望感や人間不信の感情はなかなか心から出ていかない。そして、村山の隣の席、というのは想像よりはるかにしんどい場所だった。

村山の純粹さとか、優しさとか、そういったものはその頃の俺にとつては心を癒すものである一方で心を傷つけるものであり、不安を増大させるものであり、まるで副作用の強い薬のようなものだった。

十一月中旬。

気候は日増しに寒くなり、いよいよ暖房器具が導入された。

暖房器具が導入されたため、誰も教室から出たがらず、結果として多くの生徒が学校に残って自習をしていた。

もしかしたらこれが学校側の狙いなのかもしれない。というより、たぶんそうである。

だが、さすがに五時を過ぎると残っている生徒の数はぐっと減り、教室には片手で数えられるほどの生徒しかいなくなる。

ある日の午後六時前、三年一組の教室でむさくるしい男ども五人が勉強していた。

先日の二者面談で、俺を含むここにいるメンバーの大半は志望大学のレベルを下げることを提案されていた。

長沢はT大薬学部をあきらめて他の国公立大の理工系学部化学系学科に進むことを勧められ、藤岡は致命的に文系教科ができないことから大幅な志望校ダウンを余儀なくされ、徳元は国立S大学の農学部まで志望校を下げていた。そして俺は、「K大なら受かる」と言われ、日増しにK大へ気持ち傾きつつあった。

最終的に、いまだに志望校を下げているのは、小村ただ一人だけだった。

その小村ですら、「トップ合格する」と息巻いていたのが、気が付けば最下位で滑り込む計画ばかり立てるようになっていた。

いよいよ、自分の実力に皆気づかされたのだった。夢を見る時間は終わりを告げた。

俺は、報われもしない恋愛にうつつをぬかした天罰を、今になって受ける羽目になったのだ。

あんまりだよな、と俺は呟いた。あんまりである。

恋愛も、受験もうまくいかなかったら、もはや俺はどうすべきだというのだろうか。

家の事情で浪人は不可能だから、「O大工学部卒、O大大学院工学研究科博士課程前期修了」というプラチナチケットを手に入れるチャンスを、俺はほとんど失ってしまったようなものではないか、と俺は思った。それどころか、K大ですら危ういのが今の俺である。

学力だけが俺の頼みの綱だった。自尊心を満たす唯一の手段だった。なのに。なのに。

俺はもはや絶望していた。だが、それと同時に、周りに「絶対受かる」と吹聴して回っていたK大にだけは落ちられない、と考えた俺は、必死で勉強していた。

もはや、「大学受験」は自分のちんけなプライドを守るための手段と化していた。

そして、十一月下旬のある日。

俺はこの日も放課後に居残って勉強していた。

だが、突然俺の手が止まった。ふと、無力感にとらわれた。

俺は何をこんなに一生懸命になっているのだろうか。自分のゴミみたいなプライドの為だけに勉強して、何が楽しいのだろうか。勉強していい大学に入ったから幸せになれるというわけではない。

断じてない。なら、どうして、俺は勉強するのだろうか。あらゆる

面で才能に満ち溢れ、外見もよく、世渡りがうまく、可愛らしい彼女を連れて歩く奴が、世の中にはごまんという。

そんな奴らからすれば、俺はもはやお笑い草でしかないのではないだろうか。

そう思うと馬鹿らしくなり、俺は荷物をまとめて家路についた。

遠回りをしようと思いつき、駅まで行ってみることにした。

今だからこそいえるが、もしこの遠回りがなければ、俺は今どうなっていたかわからない。

(第二十章へ続く)

第二十章 桃色の脳内 続編

そろそろ夜の七時になるかという時間帯、駅前はひどく混雑していた。

学校帰りの中高生、会社帰りのサラリーマンやOLの大群が、長く一列に並んでバスを待つ様子を見て俺は、アイドルの握手会につめかけたファンの大群を思い出した。

その列の横をぼんやり歩いていると、チェック柄のマフラーに半分隠れた、しばらくぶりに見る顔に遭遇した。飯山である。

飯山があっ、という顔をしてこちらを見て、軽く手を振って合図した。俺も手を振り返し、飯山のほうへ歩み寄った。

「夏以来やなあ」「時間が経つのは早いもんやね」

飯山が口元のマフラーを手で下げながら言った。俺は黙ってうん、とうなずいた。

おかしいな。どうしてこんなに嬉しいんだろう。どうしてこんなに安心するのだろうか。

俺はそんなことを思ったが、気の迷いに違いない、ということだけで付けた。

「小村君ちゃんと勉強してる？」飯山は笑いながら言った。

「うん、必死こいてる」「お前に騙されて、かわいそうに」「俺はそう言つと笑った。

「騙してないよ」「たぶん付き合うことはないと思うけど」「飯山が真顔に戻った。

「どうして」「イケメンだよ？」俺がそう聞くと、飯山はまた笑いながら一言言った。

「あの子絶対むっつりスケベの変態だもん」

なるほど、こいつにはすべてお見通しというわけか。

俺は飯山が怖くなった。俺のさっきの感情も読まれていたら、と思

うと俺はひどく恥ずかしかった。

俺と飯山は一緒に笑った。悔しいが、妙に心が癒される。飯山が背を向けているバス停にバスが止まり、到着の合図のブザー音が鳴った。飯山は首だけを少し回して後ろを確認した。

「バス来たから行くね」「ま、もうこんな時期だしさ、お互い頑張らましょ」

そう言うと飯山は自分で自分の発言を確認するかのようにつん、とうなずき、俺の目を見てきた。

長い黒髪がふわっと揺れて、甘い香りが漂う。飯山の大きな瞳が俺の瞳をじつと見る。

俺はまたドキツとした。つくづく軽薄な男である。

「じゃ」飯山がそう言って、やってきたバスに乗り込んだ。バスの中の段差を登ったところで振り返り、こちらへ手を振った。

俺はあわてて手を振り返すと、また家へ向かって歩き出した。

時間にして一分ぐらいだったが、この一分はその時の俺にとっては何十時間もの価値があった。

この一分ほどの会話が、もしこの日に成立していなかったら、俺は今頃、予備校の大講義室にいたに違いない。それほど、俺にとっては大きな意味のある会話だった。

家に帰る途中、俺の頭はフル回転していた。

いったい俺にとって飯山とはどういう存在なのだろうか。村山とはどういう存在なのだろうか。

答えはとうとう出なかった。

そしてふと、自分ほとんどない女好きではないだろうか、という結論に至った。

結局俺は、いちずに一人の女性を愛し続ける、古き良き日本男児の魂を受け継いではいないようだ。

とんだ女好きであり、なのにさえない、モテない、神経性胃弱持ちの童貞である。

俺は笑うしかなかった。俺自身、そして俺の運命を笑い飛ばすほか、俺にできそうなことはなかった。だがその笑いには、多少の明るい感情も含まれていたのだった。

(第二十一章へ続く)

第二十一章 愚者たちのクリスマス

飯山と会ったその翌日から、俺はそれまで以上に勉強するようになった。

つくづく馬鹿な男だと思う。しかし、これが俺という人間なのである。仕方ない。

もちろん、理由はそれだけではなかった。家に帰って、久しぶりにプラス思考になった頭で考え直してみても、初めて俺は、自分が多くの人に期待されている、という考えに至ったのだった。

しかし、これまで何もしてこなかった分の代償は重かった。

十二月初め、周りの大半がセンター試験の過去問でそこそこの点数を取る中、俺はいまだに六割台を抜け出せそうにない状態であった。もはや間に合わないかもしれないが、それでも俺は必死でやり続けた。

あの予備校の冬期講習も申し込んだ。これはもちろん、自分のモチベーションも考えてのことである。

次第に勉強以外のことは考えられなくなってきていた。そんな矢先、ある笑える事件が起きたのだった。

十二月も中旬を迎え、世間はすっかりクリスマスモードに染まっていた。

放課後の教室にはいつものメンバーが集まっていた。

「お前ら、どうせ今年も寂しいクリスマスをおすごすんだろ」突然、小村が勝ち誇ったように言い放ち、そして笑った。

「小村、お前こそどうなんだよ」徳元が苦々しい顔をしながら言った。

「内緒」小村はニヤニヤしながら言った。一同がひどくイライラした。

「お前、飯山にも飽きたのかよ」俺は半ば呆れながら言った。まったくもってこいつはどうしようもない奴である。飯山にも飽きて、ほかの女にうつつをぬかそうというのか。それなら赦せない。飯山に謝れ。頭が削れるくらいに地面に頭をこすり付けて土下座しても足りない大罪である。

「ほんと、チャライ男ですねえ」徳元が小村のほうを向いて言った。「お前ら勘違いしてるわ」「まあ、詳しいことは秘密だ」そう言うと小村は上機嫌に笑った。

その後ろにいた藤岡もまた、ニヤニヤしていたのを俺と長沢は見逃さなかった。

「おい、藤岡、何笑ってる」長沢がピシヤリと言った。こいつはどうやら本気である。みっともない。

「なんもないよ」藤岡が相変わらずニヤニヤしながら言った。

俺はもはや追及する気にもならなかった。というのも、もし、もし、仮に、こいつがクリスマスに女の子と一緒に過ごすようなことがあれば、学年の男子の約半分が発狂するに違いないからである。それだけは避けたい。

教室に居合わせた数人の男どもの間に不穏な空気が流れたまま、時間が過ぎていった。

月日は流れ、忘れもしない十二月二十四日。

その日は終業式の日だった。俺は夕方に冬期講習が入っていたので、手早く帰る準備をしていた。

すると後ろから藤岡が近づいてきた。ニヤニヤしている。何をしようというのか。

「今日は面白いことになるぞ」藤岡はそう言うのとケタケタと笑った。

「どついうことだ」俺は藤岡に聞き返した。

藤岡が悪魔的な笑いを浮かべた。こいつ、何を画策している。

(第二十二章へ続く)

第二十二章 決起計画

「何がそんなに面白いのさ」俺は藤岡に言った。

藤岡がニヤニヤしながら、俺に耳打ちしようとした。藤岡の息が耳元にかかり、俺は気味が悪かったので身をすつと引き、藤岡に向き合う格好になったあと、その頭を軽くはたいた。

「ひどい人だなー」「いいもん、教えてやらない」藤岡がはたかれた頭をなでながら言った。

「すまん、謝るから教えてくれ」と俺は言った。そして藤岡の立てた馬鹿らしい計画について知った。

「そういうわけで、晩の七時に私服で駅前に集合できるか？」藤岡が聞いた。

冬期講習の授業は五時に終わる。俺はたぶん大丈夫、と答えると、予備校へ向かった。

五時を少し過ぎたころ、授業が終わった。俺は急いで荷物をまとめた。

生徒の談話室ではカップルたちが一緒にご飯を食べていた。

俺はそいつらに、お前ら全員落ちてしまえ、と呪いをかけると、駅へ向かった。

あらゆるところに浮かれたカップルがいて腹立たしいことこの上ない。だが、気持ちはワクワクしていた。あまりに性格の悪い、歪んだワクワク感ではあったのだが。

俺は昼間の藤岡の話を思い出した。

小村はクリスマスの夜にいっしょに遊びに行きたいという誘いを複数人の女子から受けていた。

しかし、いずれも「予備校で勉強したいから」と断った。

しかし、最後にあの小佐野里佳が誘ってきた時、小村は断らなかった。理由は定かではないが、純粋に小佐野が外見に関して言えばうちの高校トップクラスだったからだろう。

藤岡は、これは恋する乙女の必死の申し出を外見でフィルターをかけることによつて踏みこじる不誠実な対応であり、小村はこの件について俺の計画によつて罰を受けるべきなのだ、と力説した。

俺は、これは完全にやっかみではないか、と思つたが、面白かつたので藤岡の計画に乗ることにした。

一度帰つてから着替え、再度駅に着くと、言われた通りの広場に集まつた。いたるところカップルだらけで腹立たしいが、気にしないことにした。

藤岡だけではなく、筑紫と徳元と、女子二人が集まつていた。

俺は集団のほうへ向かつて行つた。「遅いぞ」筑紫はそう言つと俺の頭を軽くはたいた。

女子は二人いた。一人は国立文系クラスの高濱綾香で、もう一人とは面識がなかった。なんでも、私立文系の鵜川智子で、藤岡と体育祭以来の知り合いらしい。

計画はこうである。

小村は十一月下旬に小佐野を含めて三人の女子からクリスマス誘いを受け、小佐野の誘いだけを快諾した。

そして、この近辺のしゃれたレストランを徹底的に調べ上げ、駅から15分ほどのところのある隠れ家的イタリアンレストランに照準を合わせ、その予約を取つた。

このレストランは景色がほとんど見えないという弱点があり、クリスマスにはあまり客が入らないため、予約が取りやすく、かつ見つけにくいと踏んだのだらう、というのが藤岡の見解である。

藤岡は妙にウキウキしている小村を不審に思つていたが、ある時クリアファイルに入つたメモ紙にそのレストランの名前と電話番号が

書かれているのを見つけ、すべてを理解した。

その頃鵜川から、小村にクリスマススの誘いを断られたと泣きつかれ、筑紫經由で高濱も同じ目に逢っていると知った藤岡の黒い頭脳がフル稼働し、小村と同じレストランで同じ時間帯に、断られた女子と一緒にご飯を食べることで、小村に嫌がらせをする計画を立案したのだという。

さらにいいことに、そのレストランは小さく、ほとんど席がないのだ、と言って藤岡はニヤリと笑った。俺はこの話を聞いて、ここまでするくらいうまくいきすぎているように感じた。まるでアニメとか安っぽい小説のようである。

第一、この計画に乗るこの女子二人も大概ではなかるうか。そもそも、藤岡がクリスマススに女子と一緒にご飯を食べただけのようにも思える。

だが、面白そうなので、俺は何も突っ込まないことにした。

ふと、駅の出口のほうに小村の姿が見えた。俺を含む六人は急いで銀行の陰に身を隠した。

(第二十三章に続く)

第二十三章 腐臭をはなつような聖夜

銀行の陰で、俺を含む六人はなるべく固まって目立たないようにしていた。

藤岡の鼻息が首元にかかって気持ち悪いことこの上ない。願わくば息を止めて欲しい。

小村はいつも以上に着飾り、鼻歌交じりで、夏頃は噴水だったもの前で小佐野を待ちはじめた。

待ち合わせの時間の三十分近く前に現れた小村の気合の入りように、俺は吹き出しそうになった。

程なくして小佐野が現れた。このクソ寒いのに、足を出した格好で登場である。

二人とも気合入りすぎだろ、と俺は心の中でつぶやいた。今から自分たちはこの気合入りまくった二人のデートを妨害するのである。

面白すぎるではないか。

俺が黒い笑みを浮かべていると、二人は一緒にレストランへ歩き出した。

悔しいが、きわめて悔しいが、美男美女が並んで歩く様は絵になる。俺はとてつもなく逃げ出したい心境になったが、なんとかこらえた。

「あつ」突然筑紫がそう言って俺の服の袖をつまんだ。「あれ、見るよ」

筑紫が指差すほうを見ると、そこには桐島美加がいた。そして、その隣には知らない男。

身長は180センチくらいだろうか。俺は目が悪いからよくわからないが、恐らくイケメンだろう。

俺はますます帰りたい心境になり、胃がしきりに痛くなったが、小村の絶望に満ちた顔が見たい一心で俺は何とか踏みとどまった。

「お前はあっちに行くべきじゃないのか？」そう言うと筑紫はニヤ

ツとした。

「もう桐島なんぞに用はない」俺は強がってそう言ったが、内心ではかなり気になる。

あの男はいつたい誰なのだろうか。どういう関係なのだろうか。気になって仕方なかったたので、俺は小村と小佐野を注視することで自分の感情を誤魔化した。

小村と小佐野から五分ほど遅らせて、六人はレストランへ入った。席はかなり少なく、喫茶店のような店である。客はそれなりには入っている。

「予約していた藤岡です」藤岡があえて、店中に聞こえるような声で言った。

小村がこちらをふつと見た。その顔は蒼白である。俺は少しこいつが可哀相になった。

小佐野は俺たちのような底辺男子には興味がないので、もはやこちらを見ることすらしなかった。

「小村君どうしたのさ、気にすることないじゃない」小佐野は小村に（あえて）顔を近づけ、囁いた。

俺達六人が小村の向かいの席に向かう様を、小村はひどくうつろな目で見ていた。

特に、女子二人を見た瞬間、小村の顔から血の気がすつと引いていくのがわかった。

俺を含む四人の男子は必死で笑いかみ殺した。なんと最低なのだろう。

俺たちは各自好きなものを注文し、時折二人のほうに視線を向けつつ、ひたすら食事をとった。

一方小村と小佐野は一気に会話が減り、ささつと食事を済ませると、早速帰る準備を始めた。

「やばいぞ、誰かつけてこいよ」長沢が口の周りをトマトソースで微妙に赤くしながら言った。

「これ以上やったらあいつキレるぞ」徳元はそう言うと笑った。
「なんか悪いことした気がする」女子二人がぼつりと言った。
「いや、これでイーブンだな」藤岡は女子二人にそう言うのとニヤツと笑った。

こうして、ただ単に日頃の小村の尊大な態度や調子に乗った発言に対する制裁もどきを下すだけのイベントは終わりを告げた。
だが、俺はこれ終わりにはできない。

桐島のことである。ソワソワした俺の様子を見て、筑紫が俺に耳打ちした。

「桐島さんのこと気になるんか」

俺は少し躊躇した後、まあな、と答えた。

「残念、もう無理だな」「知らんぞ、桐島さんのファーストキスやら何やらが奪われていつてる頃かも知らんぞ」筑紫はそういうと意地悪く笑った。

俺はソワソワしながら、ほかの五人と一緒に帰宅の途についた。

河川敷を歩いていると、男女二人のいちゃいちゃする様子が目に飛び込んできた。

俺の背筋がぞわつとした。

(第二十四章へ続く)

第二十四章 誤りの結論

俺を含む六人は次第にその男女二人組に近づいていった。嫌な予感がしてしょうがない。

このクソ寒い中、ベンチで身を寄せ合っていていちゃいちゃしているのは、桐島美加とさっきの男以外の誰でもない。俺の胃がひどく痛みだした。

秋に俺は桐島を諦めたはずだが、目の前で他の男とイチャイチャされるのはさすがに嫌だし、そもそも本当に諦めがついたのか、現時点でもまだはつきりとはわからない。俺は自分が嫌になった。

二人の座ったベンチの前を通りがかったとき、高濱が「あっ」と小さく声を上げた。

その声に反応してベンチの二人がこちらを見た。一瞬空気が止まる。俺を含む六人は二人に軽く会釈した後、速やかに退散した。

全員が二人から50メートルほど離れたところで、俺は全員に聞こえるような声で「さっきの男の奴誰？」と聞いた。

「元H中の和田悠真」そう答えたのは高濱だった。「まあ、見た通りの男」

それは要するにチャライということだろうか。なににせよ、いよいよ恐れていたその時がやってきてしまったというのが事実だった。

さっさと彼氏を作ってくれたほうが諦めがつく、とは思っていたが、それはあくまでも「まともな」男とくつつくというのが前提である。あんな穢らわしい男なんてまっぴらごめんである。

そんなふうには、俺はまるで桐島の父親のようなことを考えていた。だが、俺にはどうしようもなかった。

翌日、昨日の計画に参加した男子メンバーは固まって三年一組の教室に入った。小村がかんかんになっていてもおかしくないと考えた

からである。

教室に俺を含む四人が一緒に入ると、小村の姿が目に入った。小村はこちらを見るとニヤツと笑った。

なにかおかしいぞ。嵐の前のなんかだろうか。

俺はそう思ったが、それは杞憂だった。小村の勝ち誇ったような笑いが鼻につく。いったいなんだ。

「おはよう、童貞君たち」小村は勝ち誇った顔でゆっくりと言った。四人はすべてを悟った。

「嘘だろ」長沢が呟いた。「ありえない、常識的にありえない」藤岡が続けた。

「いや、倫理的にだな」俺はさらにそう続けた。四人は小村を軽蔑しきった目で見た。

「お前ら、勘違いだ」「誘ってきたのは向こうだ」小村はあわてて言った。

俺は背筋に電流が走ったような衝撃を受けた。なんと軽い女、小佐野。

「うっわー」筑紫が顔をしかめながら言った。「お前ら大概だわ」

「ありえんわ」「カスだわ」

そのあとの詳しい話はいいとして、「小佐野は糞」という見解で四人は一致した。

あまりにもいろいろなことが起きすぎて、俺は頭がパンクしそうだった。

何とか頭を整理し、昨日起きた様々なことを総合して、俺は考えた。もしかして恋愛などというものは、ひどく単純で浅薄なものなのかもしれない。俺は恋愛に幻想を抱いていたのではないだろうか。というより、抱いていた。

俺はふと窓の外を見た。見えるのは高速道路と住宅街ばかりである。だが、今の俺にはこれで十分だ。

しばらく考えた後、俺は、今後の人生では一切恋愛を放棄しよう、と決意した。

(第二十五章へ続く)

第二十五章 純粹な魂

十二時を過ぎ、教室にいるメンバーは各自弁当を引っ張り出しはじめた。

「小佐野みたいなのはレアケースと思いたいな」長沢がげっそりしたように言った。

「そうじゃなかったら日本終わってるわ」藤岡もげっそりしながら言った。

だが、中学時代に好きな女子（仮にAとする）をクラスの他の男に取られ、その男が「重くなった」という理由でAをいとも簡単に振ったせいで、Aが学年を代表する「軽い女」になるという壮絶な経験をしている筑紫は、悟りきったような顔をしていて、かなり冷静だった。

「世の中には、男女問わず、二番目三番目でもいいから、みんなが憧れるような異性と付き合いたい、という奴も中にはいるんだ」筑紫は冷やかに言った。こいつが言うのと妙に重みがあり、一同が納得した。

「そもそもお前だって、桐島さんが好きになったのは桐島さんが可愛いからだろうが」「お前が桐島さんをどうこう言う権利はない、よく覚えておけ」筑紫は俺に向かってピシヤリと言った。

俺はもはや反論の余地がなく、無理やり弁当を胃に押し込んだ。つくづく自分がアホらしくなった。

俺は、高校三年間の青春を、ドブに捨てたに等しいのではないだろうか、と思うとなかなか鬱だった。

こんな精神状態で、俺はセンター試験に臨まなければならないのだろう。

この瞬間、俺は浪人を覚悟した。今の状況ではセンター五割すらとれる気がしない。

ぐじゃぐじゃの投げやりな精神状態だった。こんな状態は過去に経

験がなく、俺は真剣に焦った。

俺は二組の教室で数学の問題集を開き、適当に勉強を始めた。だが、昨日の光景が走馬灯のように駆け巡ってきて、俺はすぐに嫌になった。

ふと後ろから声をかけられた。振り向くと村山だった。

「あのさ、これがぜんぜんわかんないんだけど、いいかな」村山は恥ずかしそうに言った。

嫌だ、と言ってもおかしくない精神状態だったが、村山の無垢な笑顔を見るとそういうわけにもいかず、俺はいつものように解説を開始した。五分ほどたって解説が終わったところで、村山がポケットから何やら取り出した。そして、「これあげる」といいながら、村山はそれを俺の目の前に置いた。

よく見るとそれはソフトキャンディだった。「いつも教えてもらってるから、お礼ね」「期間限定なんよ」村山がそう言ってぱつと笑った。それは心からの、純粹な笑顔だった。俺ははっとした。

俺はありがとう、と言って作れる限りで一番の笑顔を作り、そのキャンディを口に運んだ。こんな時に作り笑いしかできない自分が情けない。何も知らない村山はまたニコツと笑って席に戻った。

キャンディを一口噛みしめるたびに俺は泣きそうになった。村山の純粹さが心に沁みた。

俺はとうとう耐えられなくなった。目から涙が出てきた。

「どうしたの？それ嫌いだった？」心配そうな顔で村山がこちらを見た。

「違うよ」とだけ言うと俺はトイレの個室に駆け込み、ひたすら泣いた。こんなに泣くのはひさびさだった。

(第二十六章に続く)

第二十六章 浄化

俺はトイレの個室にこもり、数分声を潜めて泣いていたが、トイレに誰かが入ってきたのに気付く、ふと我に返った。急にひどく恥ずかしい気持ちになった。俺は適当に涙をふくと、トイレから誰もいなくなったのを見計らって個室の外に出て、顔を洗った。泣いていたのを誤魔化すためだった。

教室に戻ると何人かが黙々と勉強していた。村山が俺を心配そうな目で見た。

「大丈夫？体調悪いの？」村山が心配そうな顔で言った。どうしてこの子はこんなに優しいのだろう。

「朝眠気覚ましにブラックコーヒー飲んできたら、腹の調子がおかしくなった」俺は適当な嘘をついた。

「そっかあ」「気を付けてね」村山はそう言ってまたニコツと笑った。

村山と会話を交わすことによって、自分の汚れた心が少し綺麗になっていくような気がした。

それと同時にやっぱり、自分がこの子と関わっていいのだろうか、という思いにもとらわれた。

俺は結局、自分で自分がわからない。それは今も同じである。というより、誰も自分で自分のことなどわからないのかもしれない。俺はそんなことをふと思った。

「なんでそんなぼーっとしてんのさ」ふと横から声をかけられ、俺は我に返った。

横を向くと、同じサークルに所属する猪瀬広大が座っていた。「さつきからずっとぼーっとしてる」

俺は朦朧とした頭で、最近寝不足、とだけ答え、顔を覆って頭を振った。

そしてトイレに向かい、顔を洗いながら、またいろいろと考えた。

もし村山がいなかったら、俺の心はいまだに汚く黒ずんだままだったに違いない。それを思うと、俺は村山にいくら感謝しても足りないくらいだろう。

俺は突然、無性に村山に会いたくなかった。これが好き、ということなのだろうか。

俺は訳が分からなくなって頭を強く左右に振ったあと、またサークルの友人たちのもとへ帰ったのだった。

（最終章へ続く）

最終章

帰りの電車の中で俺の頭はまた思考を開始した。

ここまでを簡潔にまとめてみると、高校三年間、俺は桐島を一方的に思い続けたが、結果的に得られたものはなにもなく、ただただ敗北感やら絶望感やらなんやらを味わい、高校三年間の青春時代を無駄にし、自分の大学受験すら失敗しかけただけだった、ということである。

正直なところ、あの恋愛がなければ、俺はもっとさわやかな青春を送っていただろう。

そして俺はふと、センター試験が終わった後の面談の日のことを思い出した。

必死の追い上げもかなわず、俺はセンター試験でK大学を受験するには厳しい得点を記録した。

志望変更を勧められるに間違いないだろう、最悪志望変更もやむなし、と思いつながら臨んだその面談で、担任は終始しかめっ面で俺に志望変更を勧めた。だが、俺はその様子を見て逆に、志望変更するのが嫌になった。「K大に挑戦します」と半ばヤケクソ気味に担任に宣言し、教室を出た後、俺は急に怖くなった。

俺の二次力を考えると、可能性は五割にも満たないだろう。落ちたらどうしよう。

そんなことを考えながら階段を下っていると、村山にぱったり出会った。

「あつ」「面談だったの？」村山が聞いてきた。

「うん」俺は渋い顔を作りながら言った。

「うち今から」村山はそういうと、俺と同じように渋い顔を作った。

「どこ受けるん？」村山が何の悪気もなく聞いてきた。俺はギクツとした。

「・・・K大」俺は引け目を感じながら言った。村山の丸い目がますます丸くなった。

「さすがやなあ」「頑張つてね」そう言うと村山はニコツと笑った。俺はうん、とだけ答えた。

じゃあね、と手を振り階段を駆け上っていく村山の後姿を見ながら、俺は逆転合格への意志を固めた。

また、併願の私立に落ちた時は、飯山が励ましてくれた。国立前期の二次試験が思っていたより出来ず、落ち込んでいた時もやっぱり飯山が励ましてくれた。

そうやって自分の高三の一年間を振り返って見ると、やっぱりどう考えても、桐島は俺に対して「マイナスの作用」しかもたらししていない。桐島は俺を励ましすらしなかった。落ち込ませはしたが、しかし、それでも、俺は桐島が好きだった。今も嫌いになりきれない自分が、確かにここにいる。

恋ってなんなんだろう、好きになるってなんなんだろう、という思いが、ふつふつと胸に湧き上がってきた。

俺は高校三年間の青春時代を犠牲にしてやっと、「恋愛とはなんたるか」「そもそも本当は恋愛は外見ではない」「世の中そうそううまくはいかない」などということを学んだのかもしれない。そんなことを思っていると、電車が終点の駅へ到着した。

ちなみに、の話だが、村山は地元の私立薬科大に進学した。今のところ俺との関係の進展はまったくない。

小村はあのクリスマスその後、数か月間小佐野と付き合っていたが、国立前期試験が終わってすぐに別れた。O大工学部には落ち、中期で合格したO府立大工学部に通っている。

藤岡はセンター試験の文系教科で壊滅的な点数を取り、急きよ私立専願に切り替え、今は下宿でK大学理工学部に通っている。

徳元は国立に落ちて浪人中、長沢は国立C大学理学部、筑紫は国立A大学工学部にそれぞれ進学した。

桐島も卒業とほぼ同時にあの男と別れたようだ。

こうして皆別々の道を歩んでいるわけだが、例の男五人に関しては夏休みに一度集まって会うことにしている。その時、皆がどんなふうになっているのか、俺は今から楽しみである。

無駄に使った時間も多かったが、高校三年間、俺は俺なりになにかを得ることができたような気がする。

そのためには、桐島の存在も、やっぱり必要だったのだろう。

そんなことを思っていると、俺の中の桐島絡みの黒い記憶からその黒い色がぱつと抜けていき、元の水色に戻ったような感覚を俺は覚えた。

もしかしたらこの長い長い回想は結局、このために必要だったものなのかもしれない。

俺が妙に納得していると、突然聞き覚えのある声が後ろから俺の名を呼んだ。

うれしいような、恥ずかしいような、そんな妙な感覚を感じながら、俺は後ろを振り返った。

(終わり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4251t/>

俺はリア充になりたい

2011年6月26日18時10分発行